

# 君津市山滝野塚

—国道道路改築（広岡）埋蔵文化財調査報告書—



平成15年10月

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第463集として、国道道路改築事業に伴って実施した山滝野塚の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、近世の塚の構造が明らかになるなど、この地域の歴史を知る上で多くの貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財保護やその普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係諸機関、また、発掘調査から整理作業にいたるまで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年10月31日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水 新次

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による国道道路改築（広岡）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、君津市大字山滝野字上ノ作501-1に所在する山滝野塚（遺跡コード225-024）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、南部調査事務所長 鈴木定明の指導のもと、下記の職員が実施した。  
発掘調査 平成14年9月1日～平成14年9月30日 研究員 高梨友子  
整理作業 平成15年7月1日～平成15年7月31日 研究員 高梨友子
- 5 本書の執筆・編集は、研究員 高梨友子が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県君津幹線道路建設事務所、君津市教育委員会、笹生衛氏の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。  
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「久留里」(NI-54-20-13-3)  
第2図 君津市役所発行 1/10,000君津市全図 其ノ5
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。

## 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第3節 調査の方法	1
第2章 遺構と遺物	3
第1節 遺構	3
第2節 遺物	7
第3章 まとめ	9
報告書抄録	巻末

## 挿図目次

第1図 山滝野塚の位置と周辺の遺跡(1:25,000)	2
第2図 グリッド設定図(1:1,000)	2
第3図 SM-001調査前測量図	3
第4図 SM-001表土除去後測量図	4
第5図 SM-001盛土除去後平面図	4
第6図 SM-001盛土土層断面図	5
第7図 SM-001平面図	6
第8図 出土遺物	8

## 表目次

第1表 出土銭貨計測表	7
第2表 SM-001計測表	9

## 図版目次

図版1 調査前状況(南から) 表土除去後状況(南から) 表土除去後状況(南西から)	図版3 盛土除去後状況(南から) 盛土下ピット検出状況 盛土下ピット完掘状況(北東から)
図版2 表土除去後状況(北から) SPA-A*(南東から) SPB-B*(南西から)	図版4 出土遺物(1) 出土遺物(2)

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯と経過

千葉県土木部は、館山自動車道、アクアライン等の建設に伴う周辺交通網の整備のため、接続道路の一つである国道410号の道路改築事業を計画した。この道路改築事業に当たって千葉県土木部は、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を提出し、千葉県教育委員会から、事業地内に塚が所在する旨の回答を得た。その後、塚の取扱いについて両者の間で協議が重ねられ、発掘による記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、千葉県と委託契約を締結して発掘調査を実施した。

発掘調査は平成14年9月に行い、平成15年7月に整理作業と報告書の刊行を行った。

## 第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡（第1図）

山滝野塚は、小櫃川上流域左岸、標高約95mの丘陵上に位置する。

周辺で調査された遺跡としては早稲谷遺跡、千本城曲輪遺跡、千本城用替遺跡、見附遺跡などがある。いずれも铁塔建設に伴う小規模な調査で明らかにならない部分も多いが、縄文時代は、早期の土器片が早稲谷遺跡、見附遺跡で、中期初頭の土器片が千本城曲輪遺跡で出土している。中世は、千本城の一角に位置する千本城曲輪遺跡で、16世紀前半に位置づけられる陶磁器が出土している<sup>1)</sup>。

## 第3節 調査の方法

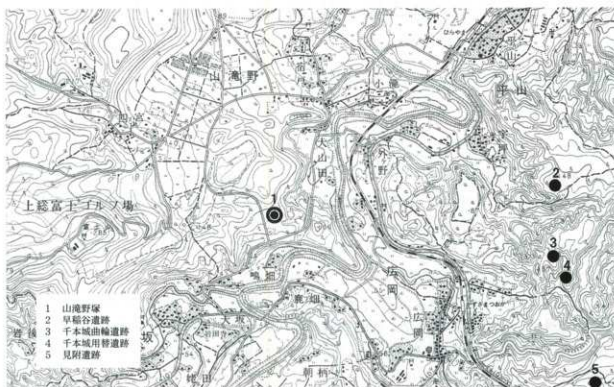
調査を行うに当たって、まず調査区の設定及び調査前の塚の写真撮影、そして地形測量を行った。地形測量は、縮尺50分の1、等高線10cm間隔で行った。その後、塚のほぼ中心で直交するようにA-A'、B-B'の各ポイントと土層観察用ベルトを設定し、平面的に塚を4分割した。分割された地区は、北東部から時計回りにそれぞれ1区～4区と呼称することとし、一括遺物はこの地区毎に取り上げた（第5図）。

同時に、公共座標に基づいて、塚とその周辺を含むようにグリッド設定を行った。20m×20mの方眼を被せ、それを大グリッドとした。大グリッドは、X座標=-82.000km、Y座標=+20.020kmを起点として、北から南に1・2・3、西から東にA・B・Cの記号を付け、さらに大グリッドの中を2m×2mの小グリッドに100分割し、北西隅から00・01…とし、南東の隅を99とした。これにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせる事で小地区名の表示を行えるようにした（第2図）。

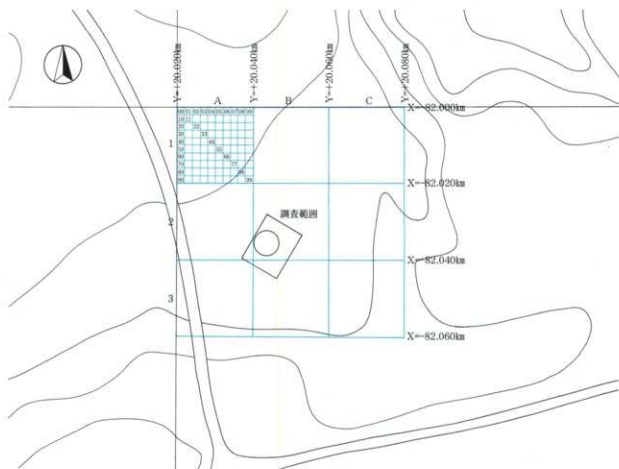
発掘は、表土層の除去から行った。サブトレンチを入れながら、表土層が全て除去できた段階で再び同一縮尺、等高線10cm間隔の測量図を作成し、写真撮影を行った。その後、ベルトを残しながら盛土層を水平に掘り下げていき、盛土層の除去後、土層断面を縮尺20分の1で記録しベルトを外した。

ベルトを取り除くと、盛土部分のほぼ中央に当たる場所に、平面形が四角形のピットが検出されたが、このピットを縮尺10分の1で記録して、調査を終了した。

注1 光江章編 1986『上総線铁塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人君津都市文化財センター



第1図 山滝野塚の位置と周辺の遺跡(1:25,000)



第2図 グリッド設定図(1:1,000)

## 第2章 遺構と遺物

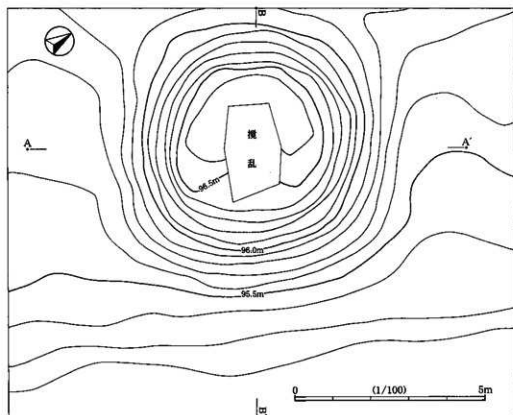
### 第1節 遺構

#### SM-001 (第3図～第7図)

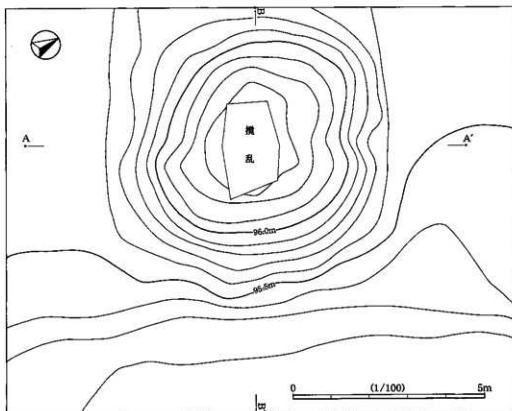
山滝野塚は、山林の中に単独で所在するが、今回調査を行うに当たって「SM-001」の遺構番号を付した。

SM-001は、盛土部分のみ植樹されておらず、視覚的にその存在が明らかであった。江戸時代の僧侶の墓と伝えられており、平成12年、道路建設が決定した際、檀家の人々によって改葬が行われたため、調査前は盛土の中央に大きな穴があいた状態であった。今回の調査の主目的は、塚が古墳を転用したのかどうか見極めることにあったが、もし古墳の転用とすれば、盛土中の主体部は既に望めない状況であった。しかし結論的には、古墳の転用でないことが明らかとなった。

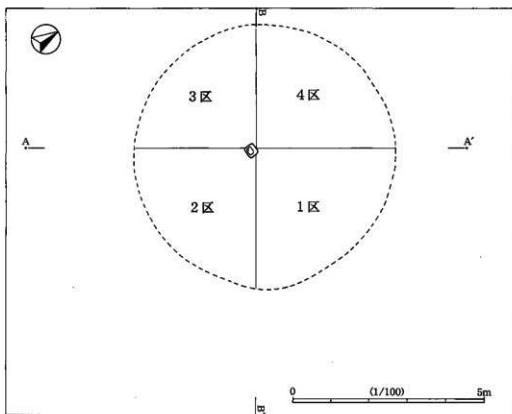
SM-001は、「旧表土層」と考えられる黒褐色砂質土層（第6図24層）上の、暗褐色砂質土層（同23層＝現表土層）の上に構築されていた。断面の観察より、盛土は、水平に層を積み重ねるようにして行われていったとみられる。第6図1層～3層・17層・18層・20層・21層は塚の表土層であるが、このうち1層～3層・17層・18層は改葬時に掘り起こされ再堆積した土と腐葉土、20層・21層は表土化した盛土層と考えられる。4層～16層は盛土層、23層～25層は地山層、26層はビット覆土、19層は攪乱層である。地山層も盛土層も基本的には同様な砂質土であり、周溝等は検出されなかったものの、周辺の土を削って盛土したことが窺われよう。



第3図 SM-001調査前測量図



第4図 SM-001表土除去後測風図

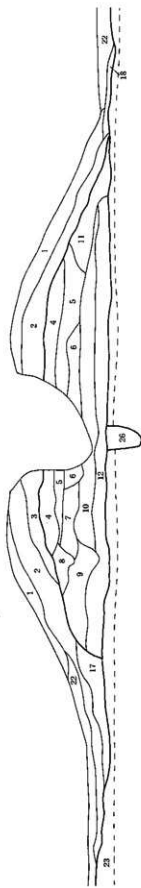


第5図 SM-001盛土除去後平面図



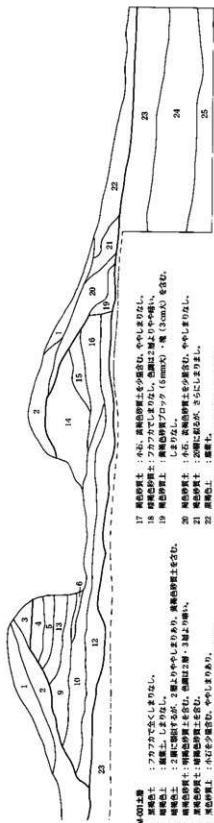
A—97.0m

A



B—97.0m

B

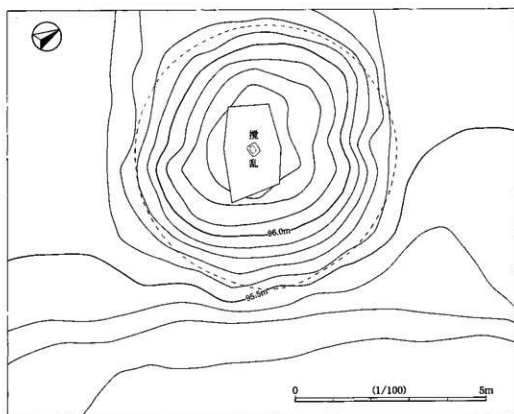


SM-001土層

- 1 黄褐色土：アフリカで広くしまりなし。
- 2 黄褐色土：黄褐色土、しまりなし。
- 3 黄褐色土：2層に類似するが、2層よりややしまりあり、黄褐色砂質土を含む。
- 4 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土を含む、色調は2層・3層より暗い。
- 5 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土を含む。
- 6 黄褐色砂質土：小石を少量含む、ややしまりあり。
- 7 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土を少量含む、小石を少量含む。
- 8 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土、小石を少量含む。
- 9 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土、小石を少量含む。
- 10 黄褐色砂質土：色調は暗い色調、小石を少量含む、黄褐色砂質土を少量含む。
- 11 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土を少量含む。
- 12 黄褐色砂質土：小石を少量含む、しまりあり。
- 13 黄褐色砂質土：小石を少量含む、しまりなし。
- 14 黄褐色砂質土：黄褐色土を少量含む、しまりなし。
- 15 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土を含む。
- 16 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土を少量含む。
- 17 黄褐色砂質土：小石、黄褐色砂質土を少量含む、ややしまりなし。
- 18 黄褐色砂質土：アフリカでしまりなし、色調は2層よりやや暗い。
- 19 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土ロツク (5mm式)・塊 (3cmA) を含む、しまりなし。
- 20 黄褐色砂質土：小石、黄褐色砂質土を少量含む、ややしまりなし。
- 21 黄褐色砂質土：2層に類似、さらにしまりなし。
- 22 黄褐色土：黄褐色土。
- 23 黄褐色砂質土：黄褐色砂質土を含む、しまりあり。
- 24 黄褐色土：やや砂質でややしまりなし。
- 25 黄褐色砂質土：よくしまっている。
- 26 黄褐色砂質土：ややしまりなし。

0 (1/50) 2m

第6図 SM-001盛土土層断面図



第7図 SM-001平面図

盛土を取り除くと、盛土開始面はやや硬化していた。硬化範囲は盛土外には及んでいないようであったが、それほど堅緻ではなく、硬化面として明確に捉えることはできなかった。盛土を行う前に地ならしを行った事によるのか、盛土があったため結果的にその部分が硬化したのかは明らかにならない。

盛土開始面では、平面的に盛土のほぼ中心に当たる場所に、平面形が35cm×25cmの四角形のピットが検出された。検出面からのピットの深さは38cmである。周囲のやや硬化した土に対して、しまりのない土の部分として検出されたが、3cmほど掘り下げたところで硬化土が検出され、硬化面が陥没していることが判った。ピットの覆土は単一層であり、遺物は出土しなかった。上部に硬化面の陥没がみられることなどを考えると、このピットは柱状のものを立たせるものではなく、何か有機物などを埋納したものである可能性が高い。

盛土中から出土した遺物はごくわずかで、ほとんどが近世陶磁器や縄文土器の細片であった。明らかに塚に伴う遺物と考えられるものは寛永通宝3枚であり、このうち1枚は盛土開始面のA'ポイント付近から出土した。盛土を開始する前にその場所に置かれたものと考えられる。

盛土の平面形は、地形測量の結果、円形であると判断される。土層断面の観察により盛土範囲を推定すると、塚の直径は約6.8mと復元できる。また、盛土の高さは約0.9mである。主体部については、盛土中に構築されたようであるが、改葬が行われ明らかにならない。盛土下や周辺からは主体部は検出されなかった。

## 第2節 遺物（第8図）

塚に関わると考えられる遺物は寛永通宝のみと言って良い状況であるが、近世陶磁器の破片も少量出土している。また、調査区には塚以外の遺構は検出されなかったが、盛土中から縄文土器・石器が出土している。

1～16は縄文時代の遺物と考えられる。1は有舌尖頭器である。基部を欠損している。先端部の欠損は比較的新しいものと考えられる。2はチャート製の石鏃である。図の右側基部は欠損している。3は黒曜石製の剥片である。右下の抉れた部分に微細な剥離がみられる。4～16は縄文時代早期の土器である。4は口縁部の破片である。口縁部は肥厚せず、直上する形態で、口唇部の稜が内面側で比較的明瞭である。文様は、斜行する沈線である。5～16は燃糸文系土器である。7は施文が浅く、沈線のようにも見えるが、燃糸文と考えられる。8は底部に近い部分の破片と考えられる。12は輪積み部分で破損している。

17は外面に赤彩の施される土器片で、弥生土器か土師器の壺の破片と考えられるが、詳細は明らかにならない。文様はみられない。

18～28は近世の遺物と考えられる。18は外面に透明感のある明青色の釉薬がみられる。青磁の袋物と考えられ、文様も施されているが、全体像は明らかにならない。19～21は、伊万里産の茶碗である。17世紀の所産と考えられる。22・23はカワラケである。24は瀬戸・美濃産鉄軸の香炉と考えられる。外面底部は露胎、内面も体部下半が露胎である。25も鉄軸で、壺類の破片と考えられる。26～28は寛永通宝で、いずれも古寛永である。26は盛土開始面から出土したもので、SM-001の構築された年代の上限を示す遺物である。27・28は盛土上面から出土しており、遺体とともに副葬されていたのが、改葬の際に掘り出されたものである可能性が高い。

第1表 山滝野塚 出土銭貨計測表

拝園番号	銭種	外縁外径(mm)		外縁内径(mm)		内部外径(mm)		内部内径(mm)		外縁厚(mm)	内面厚(mm)	量目(g)
		縦	横	縦	横	縦	横	縦	横			
第8図26	寛永通宝	24.2	24.1	20.5	20.0	7.5	7.5	6.0	6.0	1.4	0.8	3.2
第8図27	寛永通宝	24.0	24.0	20.0	20.5	7.5	7.5	6.0	6.0	1.2	0.7	2.8
第8図28	寛永通宝	23.8	23.8	20.0	20.5	7.5	7.0	6.0	6.0	1.2	0.7	3.0



第8図 出土遺物

### 第3章 ま と め

山滝野塚は、享保年間の僧侶の墓と伝えられていた塚である。檀家による改葬が行われており、墓であることには間違いないが、今回の調査の主目的の一つは、塚が古墳の転用であるか否かを見極めることであった。結果的には、盛土開始面が「表土層」であったこと、盛土開始面から寛永通宝が出土したことなどにより、塚は近世以降の所産であることが明らかとなり、さらに周溝や主体部など、古墳に伴うと考えられる遺構や古墳時代の遺物も確認することができなかつたので、古墳の転用ではないことがはっきりしたと言える。

しかし一方で、近世の僧侶の墓としては、興味深い事実を知る事ができた。調査の成果により山滝野塚の構築過程を復元してみると、まず、平面的に盛土の中心にあたる部分に四角形のピットを掘り込む。ピット中に何か埋納されたか否かは明らかでないが、ピットが埋まる。次に、盛土する場所の際に当たる場所に一枚の寛永通宝が置かれる。そして盛土が開始されるのだが、盛土の開始に当たって、軽く地ならしを行った可能性がある。盛土は、周辺の土を水平に層をなしながら行っていく。盛土中に何か副葬した形跡は、調査からは得られていない。それから盛土中に埋葬が行われるのであるが、盛土が完成してから掘り込んだものか、盛土しながら埋葬したものかは、改葬による攪乱のため明らかにできなかった。また、墓標等の痕跡も、調査段階では検出できなかった。

山滝野塚は以上のように、大変丁寧に造られた墓であったと言えるだろう。また、現状では鬱蒼とした山林の中に単独で存在していたにもかかわらず、現在に至るまで打ち捨てられる事もなく、近世の僧侶の墓として人々の信仰を集め、供養を受け続けてきたものである。今回塚が失われ、改葬が行われる事となってしまったが、今後も変わらぬ供養が続く事を祈りたい。

第2表 SM-001計測表

遺構番号	平面形	規模	盛土高	埋葬施設	出土遺物
SM-001	円形	直径6.8m	0.9m	盛土中(改葬済)	銭貨(寛永通宝)・陶磁器片

写 真 图 版



調査前状況(南から)



表土除去後状況(南から)



表土除去後状況  
(南西から)



表土除去後状況(北から)



SPA-A' (南東から)



SPB-B' (南西から)



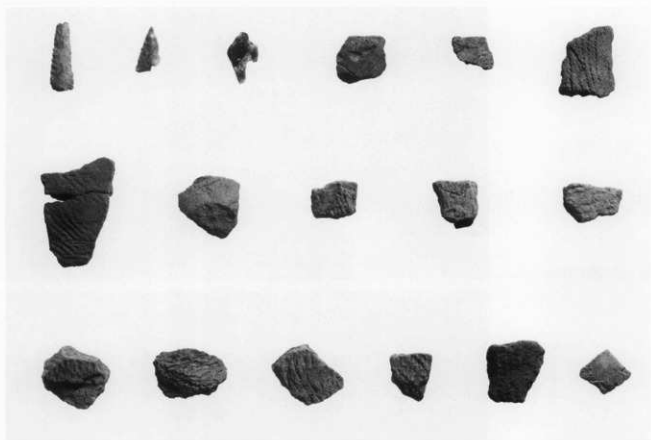


盛土除去後状況(南から)

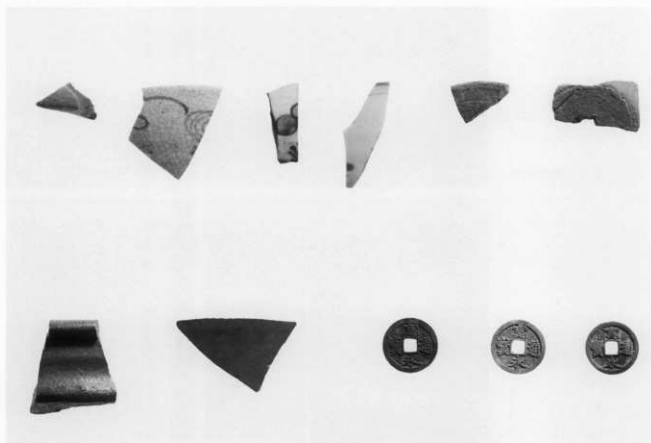


盛土下ビット検出状況

盛土下ビット完掘状況  
(北東から)



出土遺物(1)



出土遺物(2)

## 報告書抄録

ふりがな	きみつしやまたきのづか							
書名	君津市山滝野塚							
副書名	国道道路改築（広岡）埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第463集							
編著者名	高梨 友子							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL. 043-422-8811							
発行年月日	西暦2003年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまたきのづか 山滝野塚	ちばけんきみつし 千葉県君津市 おおかみまの 大字山滝野 あづまのまへ 字上ノ作501-1	12225	024	35度 15分 40秒	140度 03分 12秒	20020901 ～ 20020930	塚1基	国道道路改築工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山滝野塚	塚	近世	塚	縄文土器(早期)、石器(石鏃)、近世陶磁器・銭貨				

千葉県文化財センター調査報告第463集

### 君津市山滝野塚

— 国道道路改築（広岡）埋蔵文化財調査報告書 —

平成15年10月31日発行

編 集      財団法人 千葉県文化財センター

発 行      千 葉 県 土 木 部  
千葉県中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2

印 刷      三 陽 工 業 株 式 会 社  
市原市五井5510-1